



うまく力を配分すれば時間とコストを有効活用できる

日東精工 生産技術部加工組立課組立係係長

## 生産設備組み立て

廣兼 靖彦さん

モノづくりの  
達人

▷33

日東精工でファスナー製造設備の修理や改造、新規製作に携わる廣兼靖彦さん（41）は、モノづくり好き。舞鶴工業高等専門学校出身で、入社以来、生産技術部一筋に歩む。これまで、2009年に数値制御フライス盤、10年にフライス盤、15年には機械保全のそれぞれ1級技能士に合格。14年には同社で3人目となる「京都府明日の名工」を受賞した。

加工係を経て、今は係長として7人の組立係を率い生産体制の維持に力を注いでいる。「年齢層が広く、指導・管理は難しいが、年上の人から教えられることも多い」（廣兼さん）。

直接モノづくりに関わることは減ったものの、現場から離れたわけではなく、技術の勘はむしろ鋭くなっている。

その技能が発揮されたのは、高速フレイム（HVOF）溶射が新導入された時だ。ネジ頭を製造するヘッドやネジを切るローリング機は、摺動面の金属材料が精度や耐久性を左右するため、溶射で表面処理する。そこで溶射する金属や摺動実験機を試作。長期間テストを繰り返し、実用化につなげた。

誰も経験がない業務だったが「第一人者になれる。失敗も技能蓄積に生かせる」（廣兼さん）と意欲的に取り組んだ。

## 失敗も技能蓄積に生かす

加工組立課課長の本田実さんは「しっかりと結果につなげてくれた」と評価する。

職場は少人数。1人の技術が少しでも高まれば全体底上げが図れるため、若手への伝承に余念がない。まず「真の原因追究が重要」（同）とした上で、キーポイントには時間をかけつつ、うまく力を配分すれば時間やコストを有効活用できることを「加工の手抜き」として「加工の手の抜きどころが分かる」（同）と、独特の表現で示す。加工係での経験と、技能の高さに裏打ちされた廣兼さんならではのといえる。18年は、特級技能士にも挑む。

（京都総局長・谷正美）（水曜日に掲載）